

松崎俊久編『寿命どこまで伸びる?』

女子栄養大学出版, 1984年1月, 348ページ

本書の題名は、単にこの分野の専門家や政策担当者にとっての学問的関心事の対象であるばかりではない。今日、誰でもが興味と関心をもつ問題である。特に、日本では今日世界一の長寿を達成しているだけに、これからの伸びていく可能性があるのだろうか、そうだとすれば、それはどうすれば可能であるかは、すべての人々が深い関心をもっている課題であるといっても過言ではないであろう。本書は、この難問に取り組んだ極めて野心的な共同労作であって、多くの人々にとって裨益するところ大きいであろう。もちろん、この課題は非常に複雑な自然科学的、社会科学的メカニズムの研究であるだけに、期待されるような単純な計量化を示すことができないことはいうまでもない。

しかし、それぞれの異なった専門家の平易な叙述と高度な内容を意図した努力は、一般の人々と専門家の両者を満足させることに成功しているように思われる、そこで、本書の内容とその特徴について若干説明しておこう。

第1は、第4編の「健康長寿のための運動(労働)の質と量」を担当した山地啓司(教育学)を除いて、他の執筆者はすべて自然科学特に医学系の人々であるということである。

第2は、寿命は「生命の持続」を意味するものであるから、生命そのものについての生物学的説明ならびに人間の臓器の老化とそれぞれの限界についての病理学的解説が行われている。小山内實による第2編「地球における生物の進化と寿命」は前者であって、動物の最大寿命とその要因についての説明が行われている。嶋田裕之の第3編「人間のからだ、各臓器のいのちの限界」は後者であって、各臓器の老化が異なった過程をとり、単純な機能の衰退の過程ではないこと、今日、なお研究結果は仮説の域にとどまっており、今後の研究にまたねばならないことが指摘されている。

第3は、本書の中心部分ともいべき日本人の寿命についての研究である。松崎俊久による第1編「戦後日本人の寿命の伸びとその背景」においては、いわゆる日本人の平均余命の急速な伸長とその背後における食生活・栄養の重要性についての強い指摘が行われている。この観点から、松崎はさらに第5編で「健康長寿のための食事とそのあり方」において豊富な内外の資料にもとづいて、日本人の食生活における、米を主食として温存しながらの動物性食品の増加といった賢明な食パターンが今日の低死亡、そして最高の長寿をもたらしたことを強調している。

さらに、菱沼從尹による第6編「寿命の予測、人間は何歳まで生きられるか」は本書の課題に対する回答を端的に示したものといえよう。日本人の寿命についての縄文時代から今日に至るまでの推移の分析が行われ、そして最後に「日本人の平均寿命とその限界を探る」によって締めくくられている。内外の研究、特にアメリカの N. Keyfitz (1978) の研究(限界値80歳)や J. F. Fries (1980) の研究(限界値85歳)等を紹介しながら、日本人の平均寿命の限界値の上限は85歳、下限は80歳として、その間にあると指摘している。また、菱沼の1976年推計では平均寿命の限界は77.40歳(男)、81.70歳(女)、さらに1980年推計では77.45歳(男)、82.94歳(女)とさらに伸びている。ここで興味深いのは、Fries 教授が主張した“生存率曲線の垂直下降現象”論である。菱沼の1980年推計によると2000年生命表では80歳の生存数が男53%、女71%と高いが、このことは80歳以上といった高年齢において死亡が集中し、生存率曲線は直角線に近いものになるということで、社会的、経済的に重大な影響のあることを示唆している。

(内野 澄子)